

一般演題 5 O5-01

Immersion Pulmonary Edema を発症後、発症危険因子を除外して再ダイビングを行った事例

○森松嘉孝¹⁾ 村田幸雄²⁾ 土居 浩³⁾ 吉田春菜⁴⁾

- 1) 久留米大学医学部環境医学講座
- 2) 国際潜水教育科学研究所
- 3) 社会医療法人財団仁医会 牧田総合病院
- 4) 鹿児島県立大島病院

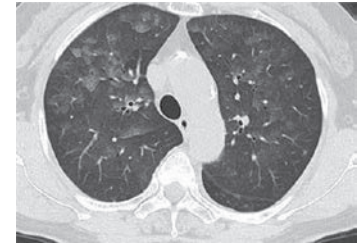
【背景】

2024 年, SPUMS と UKDMC は IPE 発症者における再ダイビング指針に関する共同声明を発表し, 圧縮ガスダイビングを行わないよう強い勧告を受けたにもかかわらず, 再ダイビングを選択した場合, 原因疾患および危険因子が適切に除外された後のみ行うとされている。今回, Immersion pulmonary edema (IPE) を発症し, 後遺症なく完治した後, ダイビングを再開した事例を報告する。

【症例】

67 歳女性。身長 155cm, 体重 59kg。45 歳時にダイビング免許を取得。疼痛に対してロルノキシカム, プレガバリンを使用していた。某年 7 月, 初日 4 本のドリフトダイビング (図 1) を行った。翌日, 強い潮の流れに逆らって 1 本目のドリフトダイビング中, 普段より息苦しさを感じ,

エアーの減りが早かった。船に上がるとピンク色の涎を認め, 診療所にて SpO2 84% であったため, ヘリにて緊急搬送。両肺にて coarse crackle を聴取し, 画像



上肺水腫を認めた (右写真)。酸素投与にて翌日症状は軽減, 画像上著明な改善を認め, 第 4 病日に退院した。発症から 5 ヶ月後の胸部 CT 検査では異常を認めず, 発症から 1 年後にダイビングを行った。

【結果】

鎮痛剤を中止し, 初日の午前にシュノーケリングと 10m のダイビング, 午後 10m のダイビング, 翌日 20m のダイビングを 2 本行うも, IPE の再発は認めなかった。

【考察】

本事例の IPE 発症誘因は, これまで経験したことのない水流に逆らった運動で, 画像も淡いすりガラス陰影を呈しており, これはトライアスロンや軍事訓練において発症する swimming-induced pulmonary edema (SIPE) と共通である。このような事例は循環器系疾患を基礎に持つ IPE 事例と治療反応性および予後が大きく異なる。今後は IPE 再発の原因・病態を明らかにすることで, 再ダイビングが可能な事例が明確にあると思われる。

22 年前にダイビング免許を取得し, これまで一日 3 本ダイビング
某年 7 月 22 日, 沖縄県にて初めて 1 日 4 本のドリフトダイビング
(最大深度 26.1, 22.1, 25.7, 23.6m)。

翌 23 日, 6 時 46 分に 1 本目のエントリー (30.6m)。

- ・ 普段ドリフトダイビングを行っているスポットよりも流れがかなり早かった。
- ・ これまでも苦しくなることはあったが, 今回はかなり苦しかった。
- ・ 絶対に誤嚥していない

民宿へ戻るも息苦しさが持続したため
約 2 時間後に診療所受診
SpO2 84%, 異常な呼吸音を指摘されヘリにて搬送 (酸素 3L にて SpO2 93%)

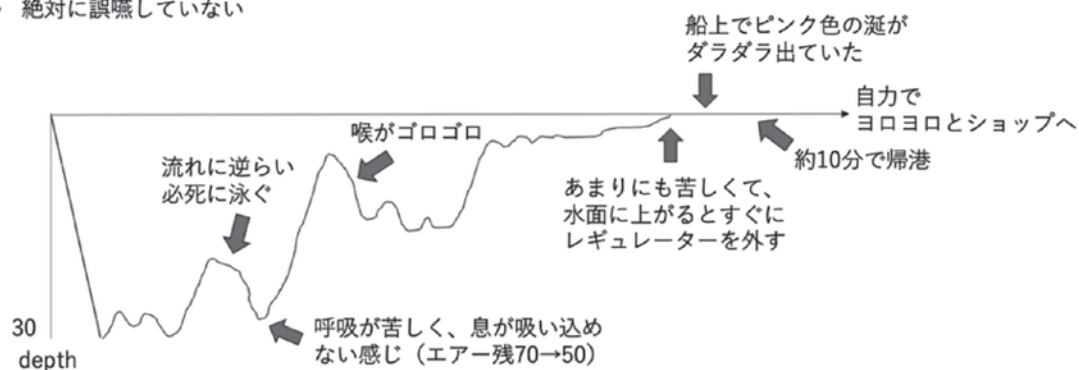


図 1